

令和3年度第2回 岩手県総合教育会議 会議録

1 開催日時

開会 令和3年12月20日(月)午後4時

閉会 令和3年12月20日(月)午後5時

2 開催場所

岩手県庁 3階 第一応接室

3 出席者

達 増 拓 也 知事

佐 藤 博 教育長

新 妻 二 男 教育委員

畠 山 将 樹 教育委員

宇 部 容 子 教育委員

小 野 寺 明 美 教育委員

泉 悟 教育委員

熊 谷 泰 樹 ふるさと振興部長 (※オブザーバー)

4 説明等のため出席した職員

佐藤教育局長、高橋教育次長兼学校教育室長、渡辺教育企画室長兼教育企画推進監

藤井教育企画室学校教育情報化担当課長、中川学校教育室学校教育企画監

八重樫参事兼教職員課総括課長、清川首席指導主事兼保健体育課総括課長

藤原首席社会教育主事兼生涯学習文化財課総括課長

米内学事振興課総括課長、細川学事企画担当課長、田代主幹兼私学振興担当課長

5 会議の概要

(知事挨拶)

達増知事：今年は1年間新型コロナウイルスの流行が続いたということで、学校をはじめ、教育の現場も大変でありましたこと、改めて指導に当たられた教育委員の皆様には感謝申し上げたいと思います。現場の感染対策も毎日のことで大変なわけではありますが、その中で様々な活動も去年よりたくさんできたこともあり、スポーツ、文化、学校単位での活動も含めて、岩手の子供たちが非常に活躍してくれた1年でもあって、それに大人が励まされて何とかやってきた1年でもあったのではないかと思います。改めて御礼申し上げたいと思います。

そして、今日の会議は新型コロナウイルス感染対策とも関係があるのですが、学校へのICT機器の導入が予定以上に進み、政府のGIGAスクール構想についてもかなり前倒しされたような形となっています。今後、ICT機器を活用して子供たちが岩手の未来を切り開き、それぞれの未来も切り開いていくことができるように、どのように取り組んでいくかということをテーマとして用意してございます。皆様からの忌憚のない御意見をよろしくお願いいたしまして、冒頭の挨拶と致します。よろしくお願いいたします。

(協議事項)

ICT機器を活用した新たな学びへの期待について

達増知事：それでは、次第の3になります、協議事項「ICT機器を活用した新たな学びへの期待について」、まずは資料による説明から入っていきますので、よろしく願いいたします。

渡辺教育企画室長兼教育企画推進監：それでは、教育企画室から説明させていただきます。お手元の資料の「ICTを活用した新たな学びへの期待について」の1ページ目のA4横の資料を御覧願います。まず、新学習指導要領とGIGAスクール構想の関係について御説明致します。こちらの資料は文部科学省におきまして、新学習指導要領が目指す学びに対し、ICT機器を積極的に活用していくGIGAスクール構想がどのように関わっていくかを整理したものです。上段の箱枠ですが、2030年の社会と子供たちの未来として、平成28年12月中央教育審議会の答申が抜粋されています。答申では、グローバル化や高度情報化など、社会の変化が加速度を増し、かつ複雑化する中で、子供たちがより良い人生と社会を築いていくために、新しい時代にふさわしい学校教育の在り方が示されています。これを踏まえまして、改訂された学習指導要領は小学校及び中学校では既に実施され、また、高等学校につきましても令和4年度から年次進行で実施されることとなります。新学習指導要領では、真ん中の前文の下線にあるとおり、子供たちが自分の良さや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるような資質・能力の育成が、これからの学校教育には求められるとしています。この育成を目指す資質・能力ですが、左側の三角形の図で示されているとおり、「学びに向かう力、人間性等」、左下の「知識及び技能」、右下の「思考力、判断力、表現力等」の三つの柱をバランス良く育むことが大切とされています。特に、学びに向かう力や思考力、判断力、表現力等を育成するためには、主体的・対話的で深い学びに向けた授業への変換が不可欠でして、子供たちの特性を踏まえた個別最適な学びと多様な他者との協働的な学びをより一層充実させる必要があります。この主体的・対話的で深い学びへの転換を図るための効果的かつ効率的なツールが、GIGAスクール構想により整備した1人1台端末等のICT環境となります。ICTの持つ特性や強みを生かしながら、主体的・対話的で深い学びを実現していくことが、学校現場に求められています。

次に2ページをお開き願います。GIGAスクールを基盤とした令和の日本型学校教育について、御説明致します。こちらは、主体的・対話的で深い学びを実現するために、GIGAスクール構想で整備したICTをどのように活用していくかのイメージについて、文部科学省において作成したものになります。左上の「個別最適な学び」ですが、それぞれの習熟度に応じて出題されるデジタルドリルを活用して、知識・技能の定着を図ったり、教員が学習状況を客観的・継続的に把握することができるようになります。また、不登校の児童生徒が自宅からオンラインで授業に参加するといった支援が可能になるなど、個々の子供に応じたきめ細かな指導につながります。(改行追加)

次に右上の「協働的な学び」ですが、オンライン環境や大型提示装置等を活用することにより、児童生徒同士の意見や回答をリアルタイムに共有できるため、お互いの意見や考え方について話し合い、考えを深め合うことに十分な時間をかけることが可能となります。また、遠隔技術を活用して他の地域や海外との交流なども容易に行うことが可能となります。なお、本県においても、後ほど御覧いただく映像にありますプロジェクターを活用した授業やオンラインを活用した遠隔教育、海外の高校生との交流実績などもあります。さらに個別最適な学びや協働的な学びを深めるだけでなく、左下の「校務の効率化」として、統合型校務支援システムを導入し、教員の働き方改革につなげるといったことや、その右隣の「教育データの利活用による効果的な学びの支援」として、児童生徒の様々な情報をデータ化することにより、教員間の円滑な引継ぎなども可能となります。

続きまして、3ページをお開き願います。ICTを活用した新たな学びの推進についてです。こちらは県民計画のプロジェクトの1つであります学びの改革プロジェクトの中で進めております、学校等のICT機器等の整備の状況と、ICTの効果的な活用に向けた支援策を整理したものになります。県での取組になります。国においてGIGAスクール構想を進めておりますが、本県でも新型コロナウイルス感染症への対応の必要性もあり、ハード面では県立高等学校等におけるICT機器の整備を

前倒しして進めてきたところです。

まず、左上の大型提示装置（プロジェクター）ですが、箱枠のオレンジ色で記載のとおり、今年度内に全ての県立学校において整備が完了する予定です。下の青枠に活用事例を記載していますが、教員が板書の代わりに事前に作成した資料をプロジェクターで黒板に映し、電子黒板機能を使って書き込みながら説明すること等が可能となります。既に活用している学校の教員からは、「課題提出等が容易で授業構成が立てやすい」ですとか、生徒からも「注目すべきところが分かりやすい」などといった声もいただいています。

また、真ん中の無線LAN（Wi-Fi）につきましても、今年の4月から全ての県立学校で稼働しています。また、右の児童生徒用1人1台端末について、県立学校につきましては、県で整備した7割の端末と生徒の個人所有いわゆるBYODの3割の端末との併用によるハイブリット方式で導入、また、市町村立小中学校の全生徒の端末整備が完了していることから、県内の全ての公立学校で1人1台端末の環境が整うこととなります。

今後は整備したICTを授業でどのように効果的に活用していくかが重要な課題となります。そのため支援といたしまして、下段に新たな学びを推進する5つのポイントを記載しています。まず、左の「①ICT活用事例の研究・普及」ですが、昨年度から岩手大学、県立大学との共同研究を県内7校で進めていまして、活用事例等の成果を全県に普及していくこととしています。次に、「②教員研修とサポートの充実」ですが、GIGAスクールサポーターの配置、あるいは総合教育センターの教員向けICT活用研修の充実などにも取り組んでいくこととしています。その右隣「③オンラインによる家庭学習支援」では、マイクロソフト社のアカウントを県立学校の全児童生徒に付与しており、オンラインでの連絡や課題配信等を行うことが可能となっています。その右隣「④遠隔教育の推進」では、国の実証事業を活用いたしまして、総合教育センターを配信センターとする遠隔授業につきまして、県内5校を対象に実証を進めています。最後に一番下の⑤ですが、本県では県教育委員会と市町村教育委員会で構成する「岩手県学校教育ICT推進協議会」を昨年11月に設置し、県と市町村が連携する仕組みを作ったところとして、市町村を越えて広域的に取り組むような施策等も展開していきたいと考えています。

資料の説明は以上になりますが、続きまして、ICTを活用した授業の様子の動画を準備していますので、そちらを御覧いただきたいと思います。こちらの動画は、9月27日に一戸中学校で行われた理科の授業の様子を撮影したものになります。この授業は、マグネシウムを二酸化炭素の中で燃焼させる実験を行う酸化と還元に関するものです。授業の流れを御説明いたします。①始めに、動画により前回の授業の振り返りを行います。そして授業の課題について共有し、②生徒が1人1台端末を使用して、これから行う実験結果を予想します。③で生徒1人1人が行った予想をプロジェクターで映し出し、共有します。④で実験の手順についてプロジェクターを使用し説明を行います。⑤実際に実験を行い、実験結果について生徒同士で話し合いを行います。⑥この話し合いを踏まえまして、1人1台端末を使用して実験の結果を考察します。⑦として、1人1人が考察したものを提出し、プロジェクターで映して共有するという流れになります。それでは動画の方をお願いします。

（動画視聴）

動画は以上になります。これまでも説明させていただきましたとおり、学校ではICT機器の活用を切り口として、これまでの学びの形から、Society5.0やDXにより変容する社会や世界につながる新しい学びへの変化が求められています。岩手の子供たちが岩手の未来の創り手となるために必要な資質・能力について、ICT機器を活用してどのように育んでいくべきか、ぜひ御意見を頂戴いただければと思います。説明は以上になります。よろしく願いいたします。

達増知事：それでは、佐藤教育長は最後ということで、名簿順に新妻委員から御意見ををお願いします。1人5分以内でお願いしたいと思います。

新妻委員：それでは今も御紹介がありましたし、知事さんの話にもありましたけれども、ICT機器の整備が2023年度までの予定が2021年度に整うことになったという状況で、これからそれをどう活用していくかということが大きな課題になっているということで、ハード面が終わってソフト面へというこ

とだと思います。それに関わって何点かの期待、あるいはお願いというか注文も含めてお話しさせていただきたいと思います。

1点目ですけれども、いわゆるICTを活用するということで中心になっているねらい、あるいは概念が個別最適な学び、それからもう1つが協働的な学びを一体的に充実化させる、あるいは一体化させるというような学びの方向性が考えられていることが特徴です。全国一斉の休校措置等でハイブリット授業も話題となりましたが、その時にまだ使い慣れてないとか、第一歩を踏み出したばかりということもあったと思いますが、個別最適な学びは端末でやるが、協働的な学びは学級でやるということで、機械的な振り分けのようなものがあつたことも問題とされていました。また、個別最適な学びが子供や家庭の自己責任のようになってしまい、場合によっては孤立した学びのようになってしまったということもありました。例えば、宿題や課題などの学びについては、そのようになってしまったという報告もあるようです。これは大変難しいながらも、追究していかなければならない課題であり、この個別最適な学びと協働的な学びが二項対立として捉えてしまうことがあるので、そうならないように一体化を図る必要があるのだと思います。今紹介された一戸の実践も一体化が図られているように受け止めることが可能だと思いますが、こういった実践を積み重ねて二項対立しないようにしていかなければならないというのが1点目です。

2点目は、これも触れられていますが、不登校の児童生徒の指導と障害を持った子供たちへの支援も含めて、大いに期待したいと思います。と言いますのは、青森市の例がいろいろな所で紹介されていますが、2020年3月から5月の一斉臨時休業期間中に、遠隔授業をやったということがあつたそうです。その結果、前年度不登校としてカウントされていた生徒が中学校で161名いたそうですが、そのうち74.5%の120名が遠隔授業に参加してくれたと言われています。その後一斉休校が開けるわけですが、その後も遠隔授業に参加した不登校の生徒たちは92.5%、111名だそうです。中には、登校に至つたという報告もあります。その後の展開に精査が必要な部分もあると思いますが、少なくとも遠隔授業を実施することで、不登校の生徒が学習とか、あるいは学校、学級への関心と呼び起こしたことは事実のようです。そして復帰のきっかけづくりになった可能性もあるということです。ICTを活用した授業スタイルで、こうした可能性が開けるということで、こういう部分も既に県として掲げている課題でもありますが、ぜひ追究していただければと思います。

3点目は、これも既に触れられてはいますが、総合教育センターを配信センターとして遠隔授業を行うことについて、これは岩手県独自の課題でもありますが、地域の小規模校を存続させていくことを図る上で、そしてそこに在席している子供たちの多様な学びを保障していく上でも、ぜひ本格実施を図っていただければと思います。これから試行しながら追究していくこととなりますけれども、非常にここには期待したいと思います。また、こうした取組が県内の高校だけではなく小規模中学校も多くなっておりますので、その中学校の子供たちの多様な学びを実現していく上でも、多くの高校での取組が励みになるのではないかとという面でも期待しているところです。

4点目ですが、ICT活用は子供たちの学びを広げるために、あるいは深めるためにということですが、私は教師の働き方改革にも有効かと思っております。校務の効率化が掲げられていましたが、それと共に教育のデータの利活用も提起されているところです。教師の多忙化が少しでも緩和されることになれば、授業改革も含めて子供と向き合う時間が確保できるという可能性も開かれるということになると思います。子供の学びを保障していくためにも、ぜひ校務の効率化、教育データの利活用を重点的に取り上げていただければ大変ありがたいと思います。

そして5点目ですが、ICT教育を推進するにあたって、お願いというか注文になると思います。1つは子供たちの学習履歴も含めて、今後様々なデータが蓄積されていくことになり、それも利活用されることとなりますが、やはり保存・管理といった点で、我々としては注意を払っていく必要があるということです。私の前職の時代でも、情報管理が杜撰という事件があつたり、USBを紛失したとか、考えられない事案が無かつたわけではありませんので、やはりこのあたりのルール作りも含めて、注意していく必要があると思います。それから、既に報告されている事例ではあると思いますが、学校から提供されている端末を使っていじめ問題があつたということも報道されているようですので、危機管理等も含めて、様々なルール作りをしていく必要があると思います。今後、活用の範囲が広がれば広がるほど、そういったことを想定していく必要があるのではないかと思います。

最後に、私だけの問題なのかもしれませんが、今回ICTを活用した教育あるいは授業等を考えて

いく時に、例えば Society5.0 だとかGIGAスクールだとか、様々な横文字やカタカナ文字が多く、それぞれの用語とか概念がどういう関係性になっているのか、非常に把握するのに難儀したと個人としては思っております。今言った用語以外にも様々な用語が飛び交っており、一体何が目的で何が方法・手段なのか、あるいは時系列的にどういった組立になっているのか、これを判読するだけでもなかなか大変だなと思っています。例えば、GIGAスクールと出たときに、「キロ (K)」とか「メガ (M)」とか、単位を表す接頭値と思ったりもしました。それがどうやら中身が違うということが後で分かったというような迂闊な面もありましたし、最近はDXとか様々なものが出てきていて、相互の関係性とか、どちらがより大きい概念でどちらを組み込んでいるのかだとか、分かりにくいなと個人としては思っております。今後、先生だけでなく様々な学校関係者、それから子供たちや保護者、あるいは場合によってはコミュニティスクールを推進していくような方々に対しても、できるだけ分かりやすい用語の整理とか、あるいはパンフレットとか、さらには、なぜICT教育を進めなくてはならないのか、どういうふうに進めていくのかも含めて理解できるようご配慮いただければ大変ありがたいと思います。以上です。

達増知事：ありがとうございました。では、畠山委員お願いいたします。

畠山委員：ICT活用で全ての子供たちの可能性を引き出す一体的な学びと協働的な学びを実現するということについては、とても期待が大きいところです。私からはその期待を込めて、2点意見させていただきます。1点目はこれからの意識について、2点目は今後の高校の在り方についてです。

まず1点目、GIGAスクール構想の根本の問題意識を、教育に携わる方々全てが意識していきたいということです。保護者が学校に望んでいることとしては、教職員の方々にゆとりを持っていただき、個々の児童生徒に費やせる時間を多くして、個々人の能力を伸ばすことに力添えしてほしいということが多いのではないかと思います。この点について、ICTというツールの活用で教職員の方々の業務効率化、負担軽減につながることで、個別最適な学びが進められることは、とても望ましいことであると思っております。新たな取組が始まり過渡的な時には、現場の教職員の方々も苦勞が多いとは思いますが、そこは様々な方策を展開していただきたいと思いますが、教職員の方々には新たな道具の使い方や活用の仕方の習得に大きな労を割くよりも、子供たちが生きていく未来が大きく変わるからこそ、先ほど御説明の中で読み上げていただいたような学習指導要領の前文にあるような記載になっていることを、今一度よく理解していただくことに時間を割いていただきたいと思っております。Society5.0 と言われる新たな時代の到来に当たって、Society3.0、工業で成功した日本は、社会システムがその当時のまま優秀な労働者を生み出すシステムになっており、ここに切り込んで変化をさせていかなければならないということは、いろいろな所で耳にするものです。この点の問題意識があり、新学習指導要領に資質・能力の育成ということが盛り込まれているのだと思います。このことを個々の教職員がどこまで具体的なものとして理解し行動に移すかが重要だと思っております。具体的に言えば、これまで明るく元気に遅刻せず休まず時間どおりに忘れ物をせず私語をせずきちんと整理し、皆と同じことを時間どおりにやる。また、競わせて皆よりも多く知識を持つ、処理が早い。そんな人間、すなわち優秀な労働者を生み出そうとしてきたその名残、その時にできたルールがまだまだ無批判無検証のままに残されているのではないかと思います。これまでは、社会に出たらそれらは全て大切だからということで正当性を保ってきたのかもしれませんが、これからは現在ある職業の多くが無くなる社会と言われております。今回の資料でも、社会変化が加速度を増し、複雑で予測困難になるとされています。そうであれば、今までできてきた学校のルール、当たり前を全て見直さなければならぬと思っております。

学校というのは特殊な環境で、校内であれば校長先生が、教室内であれば担任の先生が、民主制を経ずに様々なルールを作ることができます。それらの中には、今の子供たちに合わないものがあること、これは不登校の現象に表れていると思っております。実感としても、多くの子供たちがルールに馴染めずはみ出して、そこに生きづらさを感じてしまっていると感じることが多々あります。Society5.0 の社会を生き抜く子供たちにとって大事なことは何か、必ずしも今まで目指してきたような明るく元気に振舞うとか、様々な要求に応じられない子供がいます。そうした子供たちは、自分たちに合った生き方を実現していく社会を生きていくと思っております。直す指導ではなく、個々の良さ、能力を伸ばす。そこに

力を入れていくべきということをもっともっと考えていかなければならないと実感しております。最近、校則の見直しということも話題になっておりますけれども、学校にはとにかくいろんなルールがあり、それらを突き詰めていくと、時間が経過したことによって、これらが当たり前だから、決まりだからという根拠しか見当たらずなくなっているものがたくさんあると思います。そういったものが Society3.0 の社会でうまく機能したとしても、これからの社会では当たり前ではない、必要ないかもしれない、そういう視点で各学校、各学年、各教室単位で考え直していただかなければならないと考えています。1点目をまとめますと、今回、GIGAスクール構想の当初の問題意識を現場に落とし込んで、ICT化で表現する個別最適な学びとは何かについて、新たな社会を見据えて意識していただきたいと強く思うものです。

2点目は、これからの高校の在り方・再編について、大きな視点を持って考えていきたいという前向きな意見です。ICT化を最大限に活かしていければ、県立高校は1つでよくなるのではないかと、いくらい大きな視点で、これからの高校の在り方を考えていくことも大事であろうと思っております。いわて教育の日に講演して下さった鈴木寛先生が多くのおっしゃっていて、多くの事を学ばせていただきましたが、その中でおっしゃっていた1つのアイデアでもあります。高校での授業がオンライン等でできるようになれば、どこの校舎に通っても良い。先生方はオンラインでできないことや、個々の生徒の伴走支援に時間を割くことができる、通う校舎は現在の高校施設を活かした県内のいろいろなキャンパスを選ぶ、広い県内に高校がある岩手の良さを活かして、沿岸のキャンパス、山間地域のキャンパスなど、それぞれの特色を持った取組を行うことができるのではないかと、子供たちの未来に多くの選択肢を示し、どのキャンパスからも好きな授業を受けられる、時にやりたいことに応じてキャンパスを移る、それを自由に選べるような県立高校を1つ用意する、そして県立高校に入りたい子が全員入れるようにする、これで中学の期間を高校入試のためではない学習に費やせることにもなると思います。また、現在取り組んでいる高校の魅力化は、地域との協働で魅力あるキャンパスづくりとして活かすこともできると思っています。ICTの活用が一気に進んだ今、前向きなこととして、このような大きな視点で高校再編について考えていくことも大事ではないかと考えています。以上です。

達増知事：ありがとうございました。では、宇部委員お願いいたします。

宇部委員：国のGIGAスクール構想が進められたことに伴い、岩手県でも遅れることなく全県立学校での整備や小中学校でも端末が配備されるということに、心から感謝申し上げます。12月19日の地元紙には、小学生プログラミングコンテスト岩手県大会の結果や滝沢イノベーションチャレンジ発表会の記事が載せられておりました。若い人たちが挑戦しているという姿に、いろいろと刺激されたものです。この中で、これからの岩手のICT教育について日頃感じていることを述べさせていただきます。

1点目は、自己肯定感に基づいた学習意欲の喚起を行えるような授業をしていかなければならないのではないかとことです。文部科学省で提唱している育成すべき資質・能力の中の、学びに向かう力、人間性の育成というのが起点になるのではないかと考えております。自己肯定感を持っていろんなことを学んでいきたいという気持ち、学習の根底にありますので、小さな子供たちは物事に対する興味・関心が旺盛で、いろいろ体験を通して試行錯誤しながら自分でできることを増やし、褒められ、できたことによって自信をつけて、また学ぼうとする気持ちが出てくるものであります。岩手県でも、いわて幼児教育センターを来年度設置することになっておりますが、この取組が岩手のこれからの教育のいろいろな面に効果を発揮してくれるのではないかと期待しているところです。

2つ目は、体験を通して豊かな感性を広げていける教育を作っていくってほしいということです。これは教員もですが、ICT教育はツールの1つとして、子供と教師のふれあいというものを大事にしてほしいと思います。子供たちに感性を持たせるためには、やはり教員が感性豊かでなければなりませんので、教員養成課程でも、そのような研修があってほしいと感じているところです。

最後に、ICT機器については、使用のルール作りが急務なのではないかと感じております。新聞等にも載っておりましたが、中学生のスマホ所持率が88%ということがありました。上手に使っている生徒もいるかとは思いますが、やはり子供たちの生活の中に、デジタル機器の及ぼす影響というものがあるのではないかと考えております。岩手には教育振興の取組があって、地元と協力してもら

えるという今までの財産があります。学校だけではどうにもなりません。特に、今までもこういうものについては、ルールを作りましょうということはありませんでしたが、それを子供たちが習慣化するためにどうするかということがなかなかできない。そして、1つの家庭ではできるけれども、皆となると子供たちは流されてしまう。そういうことがありますので、ここについてはしっかり取り組んでいかなければならないのではないかと感じております。

最近の脳神経科学者や教育実践家なども言っているとおり、子供たちに与える良い面と、それから悪い影響というものもありますので、そこも忘れずにやっていかなければならないと感じております。教育現場においては、子供たちが主役であるということを忘れずに、今まで以上に子供たちの心身や生活面、家庭も含めた教育環境に配慮し、どの子ども安心して学習できる環境を整えていく必要があると感じています。先程も説明にありましたとおり、ICT機器の活用によって、先生方のいろいろな業務も少し減り、そして子供たちの学びが効率良くいき、個々1人1人のデータが蓄積されることによって、継続して学ぶというシステムができてくると思いますが、それを可能にするためにも、ルール作りということについては、力を入れてやっていかなければならないと感じているところです。

そして授業の改善については、今も試行が始まっており、昨年度学校訪問の際も子供たちが発表したことをすぐ子供たち同士で確認しあったり、海外の学校とも交流学习をしたりしているなど、いろいろな例を見ることができました。試行錯誤しながら、いろいろな実験をするような形でまず取り組んでみる。そこで良い例がありましたら、教育センターの方から伝えていただくことで、必ず改善されていくと思います。子供たちの理解を深めるということ機械に任せるのではなく、教員や親や周りの大人が支えていくということをぜひ心得ていきたいと感じているところです。先程畠山委員さんがおっしゃっているとおり、学校現場は大変な時期だと思いますが、子供たちをよく見守るということを大切にしていきたいながら進めていってほしいと思いますし、県としては教育の動向を大所高所からご指導いただいて、財政面、人材面も含め現場を支えていただければ幸いです。以上です。

達増知事：ありがとうございます。小野寺委員お願いいたします。

小野寺委員：まずは、学校現場において1人1台端末がしっかり整備されたことに感謝申し上げます。ICT機器をどのように活用し子供たちがどう活かしていくか、研修や会議など取り組み始めたところに、新型コロナウイルス感染症が発症し、急速な対応を迫られた学校現場は大変だったかと思います。それでも学校訪問をした際、タブレットを使った授業を見せていただくと、小学校では先生が画面に出る児童の回答を見ながら導いたり展開させたり、楽しく授業をしている様子が見られました。高校では分かる生徒が分からない生徒に教えたりする姿も見られました。とてもこれから期待が持てるなと感じました。軌道に乗るまでは先生方は苦勞するかもしれませんが、まずは先生も生徒も使ってみる、慣れるということが必要だろうと思います。このICTの活用に期待することは3つあります。

1つ目は、子供たちがどんな生活環境であっても学びが保障され、夢や希望が持てるということです。岩手は県土が広く、自分の住んでいる土地や環境によって通学や活動が困難な生徒もいるのではないかと思います。環境によって学びが限定されるのは悲しいことです。遠隔教育を充実させ、どこに居ても希望が持てる学びの環境を推進してほしいと思っています。

2つ目は、不登校や休んでいる児童生徒にも、同じように学ぶことができる環境を作ることです。何らかの事情で学校に来られない子供たちは、学校には行けないが同じ学びができるということで、学校につながっている、皆とつながっているという気持ちになれるのではないのでしょうか。その子の学力や能力を伸ばすためにも、有効に活用すべきだと思っています。

3つ目は、私たち大人もこの社会状況の中で、オンラインでの業務が増えております。時間の短縮や事務作業の効率化などでICTを活用する効果は大きいと思います。働き方改革にもつながります。少しでも先生方の時間を、御自身と子供たちのために使ってほしいと思います。先程お話にも出ましたが、先日、新聞に一関高専の学生さんが小学校に出前授業をした記事が載っていました。その内容は、ICTを使ってプログラミングの考え方を教え、児童に理論的な思考を伝えるというものでした。児童は興味を持って、考える楽しさや解ける喜びを知ったそうです。ただ機器を使うだけでなく、考え方や知る喜びが深い学びへとつながっていくのではないかと思います。これは教えてもらう小学生はもちろん、教える側の高校生にとっても良い学びの機会だっただろうと思っています。

最後になりますが、ICT機器を使って知る楽しさ、学ぶ楽しさはありませんが、様々な分野に視野を広げ世界へとつながることもまた魅力です。子供たちにはいろいろな視点から多くのものを吸収し、可能性を広げていってほしいと思います。今後は教科に限らず、自分の探究へとつながる活動や、自分なりの学びとして、1人1人が自主的にICTを活用できるようになることを願っております。以上です。

達増知事：ありがとうございました。泉委員お願いします。

泉委員：いわて県民計画の中にも「ICTを活用し児童生徒の実態に応じた授業改善や家庭学習の充実に取り組む」と掲げられております。教室の中にプロジェクターあるいは生徒用の端末、これを導入することによって授業の中で容易に視覚に訴える、デジタル化された教材を示すことができること、それから生徒がグループで作成した資料をプロジェクターなどで共有し、そのまとめを全体場で発表することを通して、プレゼンテーション能力が向上することなど、子供たちの理解がより促進され、各教科への関心、意欲、態度が大いに高まるものというように思っております。

先月の26日に開催された県産業フォーラムというものに私は初めて参加してきましたが、そこで、専門高校で学ぶ多くの生徒たちの様々取り組んでいる研究のプレゼンを拝見し、その堂々とした発表と研究内容の素晴らしさについては、ICT機器の活用を通して培われてきているものだと感じたところです。ICTを活用する環境、特にハード面での整備は年々進んできておりますが、ソフト面では学校現場の裁量に委ねられている現状があるように思います。子供たちに確かな学力を保障するための授業づくりの研修会、授業内での子供たちの評価の在り方など、現在も総合教育センターなどで様々取り組まれておりますが、現場の先生方にとって活用しやすく手助けとなるような積極的な研修体制をより一層展開されることになれば良いというようにも思っております。

また、ICT関係の管理メンテナンスを行う先生方の負担軽減の方策をどうすべきか。慣れない教材作りや準備に時間が割かれ、本来行うべきことができないうということもあるかもしれませんので、これらをどうしていくのか同時進行で考えていく必要があると思っております。そして、設置したICT機器の不具合や故障が年次進行で出てくるかもしれない。その時のメンテナンス関係。まだまだ十分とは言えないWi-Fi環境の更なる整備も重要なことだと思っております。各学校へのICT環境の整備は、本県で既に運用されているGベース学習サイトの更なる活用が期待されますし、小規模校で学ぶ生徒に対する遠隔授業が今年度から推進されるなど、学びの機会均等、地域バランスの解消、生徒個々の習得状況に応じた学習の支援などに、今後更に大きな効果をもたらすものと認識しております。広い面積を持つ本県において、子供たちが学ぶ環境は様々あります。学ぶ子供たち1人1人に伸ばすべき個性と学びへの欲求の種がある、将来への大きな可能性を持っているというように思っております。それらを見つけ、引き出し、そして人材として育てるのが周囲にいる我々大人、保護者、教員であり、それを実現するための一助となるICT環境の整った新たな学びの場は、未来を見据える上で有効であると確信しているところです。

とは言っても、人と人とのつながり、教員と子供たちの信頼関係の構築は、今までと変わることなく大切なものだというように思います。教員は目の前の子供たち1人ひとりを大事に考え、言葉の力、豊かな表情、仕草なども大切にしながら、これらの機器を活用しなければならないものと考えます。新しい学びをどのように授業に取り入れていくか。その手法の研究などは今後必要ですが、基本は、教員が子供たちにどれだけ熱量を持って向き合っていくか、そこに尽きるというように思っております。私は、人は人によってしか変わることができないものだというように思っています。今後、この新たな学びの推進が、ICT機器を活用することを目的とするのではなく、これを通して子供たちにどのような力をつけさせたいのか、どうすれば子供たちが主体的に学べるようになるかという視点を忘れずに取り組んでいくことを願いながら、これからのICT機器を活用した新たな学びの取組に大いに期待していきたいと思っております。以上です。

達増知事：ありがとうございました。それでは、佐藤教育長お願いします。

佐藤教育長：財政が厳しい状況の中で、これまで本県のICT教育に向けた機器整備、ハード整備につい

て、大変ご配慮いただいたということに感謝申し上げたいと思います。小中学校も含めまして、県内でほぼ全部整備が進んできました。おかげさまで、整備されたICT機器をいかにうまく活用していくか、単にうまく活用だけでなく様々な弊害であるとか、あるいは予測し得ないことも起きてくるかもしれません。それらにいかにより的確に対応していくか。これは県教育委員会のみならず、市町村教育委員会共々連携を図りながら、対応していかなければならないと考えています。そういった意味でも、昨年11月に、ICTの諸課題、あるいは働き方改革に対応できるようなことを全県的に取り組むということで、岩手県学校教育ICT推進協議会という組織を立ち上げました。そして年2回、市町村の教育長と意見交換をし、具体的な諸課題への対応ということも進めてきております。この協議会の中には2つのワーキンググループを作りまして、統合型校務支援システムワーキンググループ、それから、ICT活用検討ワーキンググループを設置しています。具体的な学校現場での課題を踏まえながら、より良いシステム、あるいは活用の方法について検討しています。

まず、働き方改革の面では統合型校務支援システム、これは、小中学校の先生方が市町村を越えて異動した場合に、システムが違っていた際に対応が難しいということがあり、それを全県統一的な校務支援システムにしていこうということで、整備の年数はかかりますが、同じ方向を向いて整備をしていくことに合意をしています。それから、ICT活用についても様々な課題はありますが、お互い課題を持ち寄って、より良い活用方法を広めていこうということで取り組んでいます。また、加速化したICT整備に、学校現場で様々な負担等も出てきている面もあるのではないかとという心配もしています。12月に入りましてから県立学校を連日訪問しまして、学校長から状況等も伺っています。話の中では年配の先生方が操作に不慣れな部分があるということですが、若い先生方、それから生徒も早い対応ができて、一緒に学びながら取り組んでいるということです。それからコロナ禍での対応、学びの保障ということについて、学校現場でも前向きに取り組んでいただいているということでした。また、教育環境の整備ということで、エアコンの整備も進みまして、今年度末には全ての県立学校について整備が整います。今年の夏の猛暑の中でも試運転をしまして、夏期講習等、学校現場で活用したという話も伺っています。

そして、1点心配といえますか、県立学校の訪問の中で話題に出ていたのは、新型コロナウイルス感染症による子供たちへの影響が少し心配されているということです。メンタル面で少なからず影響があるのではないかと。不登校等の支援を要する生徒が増えている様子が見えるということです。昨年活動が制約され、学校での部活動、あるいは様々な教育活動、修学旅行も中止になったりしてしましたので、友達作りとか、あるいは相談できる相手がなかなかできなかったという面が、心配される場所もあります。そういった所には、丁寧に生徒の話の話を聞くなり観察するなり、支援の手を伸べてほしいということも校長先生方にはお願いをしています。

今後のこのICTを活かした岩手の教育の方向性ということについても、いろいろと検討を加えています。今はタブレット等を活用しながら、いろいろと学習しながら習得していくというところですが、それから個人にとっては自立して学ぶ力を身に付け、更に協働して学ぶ力、その先にはいろいろな物事に対して主体的に創造しながらどう対処していくか、ぜひそこには岩手に関わる部分を探究しながら取り組んでいただきたいと思います。私は考えています。

国の第2期まち・人・しごと創生総合戦略、これは2020年に改訂されていますが、ここでは新しい時代の流れを力にすること、地域におけるSociety5.0の推進、それから地方創生SDGsの実現など、持続可能なまちづくりといったことが謳われています。そこには私は「共創」ということをぜひ取り組んでいく必要があるのではないかと考えています。自治体あるいは学校が、地域住民であるとか民間企業であるとか、あるいはNPO法人、大学等との連携を図って、共に活動してイノベーションの創出につなげていくということが求められているのではないかと考えています。そういった取組がこの岩手の未来を創っていく子供たちに大変役に立っていくのではないかと、そういったときに世界に開かれた形でICT機器を使っていくと。県土面積の広い岩手で、そして時間的空間的な様々な壁を克服してやっていけるという状況になりましたから、それに加えて岩手県は地域とのつながりが強く、また自然も豊かで、世界とつながる情報を駆使しながら、地元にしっかり根を下ろした岩手でやらなければならない教育につながっていくのではないかと。そのように考えております。

達増知事：ちょうど時間となりまして、一巡で終わってしまいました。ありがとうございました。授業

参観もしていただいている、実際にICTが導入されている授業も教育委員の皆さんに御覧いただいでいて、だいぶ希望が持てるような状況で、うまくいきそうな感じを間接的に感じる事ができたと思っております。私自身は、さっきの動画で初めて教室の中の様子を見た格好ですが、ですから、けっこう大丈夫かなという疑いを持っていたところがありましたが、楽しそうに積極的にやっているなと思いましたが、委員の皆様のお話を聞いていても、何とかかなりそうだなという感じを得ております。

一方、共通に指摘されたことで、ルールをきちっと決めていって、いじめの問題とかデータの扱いとか、人権の侵害にならないような配慮は必要でありますし、先生の負担にならないように、むしろ先生が楽になるようにということは非常に大事なところだと思います。いろんな好事例もどんどん生まれてきていて良いのではないかと思います。さっきの授業の様子を見ていても、それぞれの生徒が書いたことが一度に全てスクリーンに映し出されるということで、ノートに書かれていることは他の生徒に見られないことを前提に書いていたりとか、見せるとしても隣近所の生徒にしか見せないようなものですが、パッと全員が見られるし先生も見ることができ、共有の効果、パワーというものはICTならではの力だと思いますし、また、つなぐ力として、海外ともつないでしまう力、共有の力というのが桁違いなところがあり、そこをうまく活用すると非常に良いと思えました。

県は、知事部局も行政のデジタル化でありますとか、行政と民間と大学とでデジタルトランスフォーメーション、DXの県の推進協議会を立ち上げていて、共通の方向性を持ちながらデジタル化を進めていこうとしています。そういったところのいろんな状況と教育分野の状況をすり合わせたりすることも大事だと思えました。教育の現場に近いような話だと、例えば民間企業だと、今はコロナ禍で就職活動にリモートを活用するということがありますが、これはコロナが収まれば全て無くなるかということ、地方から東京の企業の面接をしたり、あるいは東京の方に行っている岩手出身の生徒が岩手の企業の面接をするときに非常に便利ということもありますし、企業説明会も、従来型は体育館に多くの企業がブースを出してそこを学生が周りますが、オンライン形式でやったりして、そういうのは将来生き残るのではないかと思います。あとは、大学では手探りで授業のやり方とか学生の生活管理とかをオンライン化しているところがあって、そういう状況を眺みながら、高校のデジタル化を進めていけば良いのではないかと思います。

民間企業でITとかベンチャーを成功させた人の話とか、デジタル社会はこうなるというような話を聞く中で、共通しているのは、失敗を恐れないという感覚が大事だということです。時間をかけて準備して完成品を世に出すということではなく、とりあえず今できているものを外に出して、まずいところはどんどん直してもらいながら、開かれた形でモノを生産したり、あるいはソフトウェアシステムを開発したり、そこはゲームのリセット感覚につながると思いますが、ちょっと詰まってもすぐにやり直しというような感じで、スピーディーに壁に当たればやり直して今度は壁を突破していくというようなことです。ICTに馴染んだ物事の進め方で、子供たちは多かれ少なかれゲームはやっていると思えますし、そういった感覚は習熟しているの、授業とか学校の関係でも、子供が馴染んでいるデジタルの感覚が活かされれば、ぐいぐいと進んでいくのではないかと思います。いずれ、主な課題についてきちっと関係者と共有しながら、直すべきところは直しながら、気を付けるべきところは気を付けながら、一方で、うまくやれば希望が持てるというような状況も確認できたと思っておりますので、県知事部局はそのように進めていきたいと思っております。それでは協議を終了し、進行を事務局に戻します。

(閉会)

熊谷ふるさと振興部長：以上を持ちまして、岩手県総合教育会議を終了いたします。ありがとうございました。